論　説

〈進歩としての反動〉と〈途方にくれたヨーロッパ〉

―R.ムージルの一評論をめぐって―

藤　井　　忠

世紀転換期に工業化社会への批判として現われた非合理主義的傾向は，第一次大戦後の混乱の中で，現実の危険な力となっていった。この非合理的なものの高まり，すなわち理性と進歩を否定しつつ革命的な身振りで出現した反動を言い表わすに，die konservative Revolution または der revolutionäre Konservatismus の言葉が用いられる。時に，今日ではより直截に，der intellektuelle Faschismus という概念で捉えられることもある。だが逆説的な力の作用ということを考慮するなら，トーマス・マンがこの暗い力の高揚を見つつ用いた「進歩としての反動」(Reaktion als Fortschritt)[1] の語は，まさにニーチェ自身の用語であったものをマンが意識的に取り上げたことからも，今日でもその語としての力は失われていない。

しかしこのような言い方で表現されるのは何かとなると，A. Moeller van den Bruck や O. Spengler などの名が通常挙げられるが，しかし見方によって範囲は拡がり，その間の微妙な差の存在する一方，すべてがまた共通性を帯びて見えるということにもなる。例えば，先の der intellektuelle Faschismus の概念で問題を捉える Uwe-K. Ketelsen にしても，工業化社会に対するアンティの姿勢で対抗の構想を打ち出す場合から，単なるルサンチマンの政治行動化まで，その表現の幅を指摘しながら，範囲の広さと根の深さを見やり，「時代の遺産」という平凡な語を用いざるをえないのである[2]。

さてこの小論は，この動向そのものを扱うのではない。オーストリアの作家ローベルト・ムージルの一つの評論をここで取り上げ，反主知主義の潮流に抗しつつヨーロッパの状況に身をさらしている作家の一側面を見ることに限定される。だがその前に，この「進歩としての反動」の問題に取り組み，自己の精神的血統とのつながりにおいてこの暗い力の問題性を明らかにしてきたトーマス・マンの言葉によって，この動きをいくらかでも堀り起しておきたいと思う。

まず概念に混乱が起きている。進歩と反動，革新と保守に関する常識がそこで覆されているからである。それゆえ Th. マンは，1929年の評論「近代精神史におけるフロイトの位置」[3] においてこの非合理主義を扱う時に，なによりも上記の諸概念の慎重な扱いを読者に求めたのであった。普通のイメージからすると，革新は，理性と進歩の側に立つはずであるが，精神への反感，過去のものへの逆行が，理性と合理的な進歩を「時代おくれ」の事柄と断じ，自己を「新しいもの，若々しいもの，時代の要求するもの」として主張していたのである。過去への後戻りを，「真に革命的な運動」であるかのように見せる「虚構」が，そこに試みられていたのである (M 174)。

このような概念のすりかえとともに現われた非合理主義の動きと深くかかわるものとして，マンは評論の冒頭にニーチェの箴言を紹介して

いる。「啓蒙主義に対するドイツ人の敵意」(『曙光』Nr. 197) という標題をもつこの箴言は，一つの概念がある夢想的な逆行の中で，現実の歴史において規定された意味から抜け出て，全く逆の意味を担った巨大な概念と化し，新しい力をその羽ばたきに見せて舞い上がる過程を力強く表現しているのであるが，この概念の転換が，「進歩としての反動」の動きに関係する。要約すると，ニーチェは19世紀の前半にドイツ人が行った精神的な貢献について述べ，その全体的な傾向を反啓蒙主義とみなす。彼らによって，「理性の崇拝の代りに，感情の崇拝が打立てられた。」しかし啓蒙主義に対抗して彼らが呼び出したところのものについて，一つの転換が生じるのである。「……だが不思議である。ドイツ人があのように雄弁をふるって呪文をもって呼び出したあの精神の持ち主たちが，時の経つうちに，彼らを呼び出した者たちの意図にとって最も有害なものとなったのである。——歴史，根源と発展の理解，過去のものへの共感，新たにかき立てられる感情と認識の情熱，これらすべてはしばらくは，暗く，熱狂的で，逆行する精神のたのもしい仲間のように見えたが，ある日，別の本性を身につけたのである。啓蒙主義に対抗して呼び出されたそれらのものが，いまや啓蒙主義の新しい，より強力な守護神として，翼を大きく拡げ，かつて彼らを呼び起こした者たちのかたわらを飛び去り，高く舞い上がる。まさにこの啓蒙主義をこそ，われわれはさらに押し進めていかねばならないのだ」と。

この箴言が書かれてからほぼ半世紀近く経た20世紀20年30年代の今，呪文をもって呼び出されている過去のものとは，「下界的なもの・夜・死・魔神的なもの」にほかならない(M172)。これはまさにフロイト（そしてマン）の関心が注がれている領域であるが，実は，この深層への関心は，19世紀から受け継がれてきたものであって，19世紀というのはつまり，彼ら反動的新しがり屋たちが断ずるように単に合理主義的機械的な浅薄な世紀では決してないのである，とマンは述べる。自然科学の分野で誇らしい業績を見せたこの世紀はまた一方で，「ペシミズム，夜と死との音楽的結びつき」によってその深みを示しているのだ (M 178) と。マンはこうして諸概念の意味を歴史的文脈の中で再び明らかにしつつ，反動の手からそれを奪い返すのである。それゆえ，死と結びついた暗黒の世界との関係の仕方についても，彼らが「単に見せかけの敬虔と宗教的態度でこれを保存」しようとしているにすぎないことを指摘し，これに対して，フロイト（そしてマン）は，「認識者，解放者として，戦慄と財宝とに満ちているこの世界の地下牢へ突き進む」ことを意志していることを表明するのである (M 176)。ところで，この暗黒の世界を「認識」し，「解放」するということは，つまりは啓蒙主義につながることでもあり，したがってマンは，「言葉の狭い歴史的な意味での啓蒙主義」に対して，こうした生の暗き層とも取り組み，「真に自由な生の統一」へ向かう「偉大な，普遍的な啓蒙主義」というものを主張する (M 178)。概念のこの捉え方と再評価の仕方は，まさしくニーチェのあの箴言の含む概念転換を逆の方向へ作動させたもので，1929年という時点で，「進歩としての反動」に対するマンの戦いがいかに彼自身の問題として切実な意味をもって行われていたかをそれはまた示すことにもなる。

さて，R．ムージルの評論「途方にくれたヨーロッパ，もしくは中心逸脱の旅」(1922年)[4] もまた，工業化社会において古きものの喪失を嘆いてそれを知性の責任とする者たち (1078) に対しては，ムージル独特の仕方で彼らの虚を突いてみせる。しかしその叙述はマンのそれと大分異っている。マンが問題を歴史的に考察し，進歩と反動とを慎重に区別しながら，自己の位置を明確にすべく文を構築していくのに対して，ムージルはよりアフォリズム的であり，反構築的，そして反歴史的ですらある。「進歩

としての反動」が，政治的にはっきりと姿をとる1929年と比較すると，22年のムージルの評論には大戦とその前後の状況が大きく影を落としている。こういう時間の差を考慮しても，やはり時代の状況との関係の仕方について両者の違いに注目せざるをえないのである。ニーチェの箴言を下敷きに，マンの捉えたドイツ的問題が強烈な匂いを発して展開される「フロイトの位置」から見ると，このオーストリア作家の評論の描く「途方にくれたヨーロッパ」には，崩壊した多民族国家オーストリア・ハンガリー帝国の超国民的空気の影響が感じられてくる。それがムージルの時代描写を，中性的無機的なものにしているのではないかと考えられる。彼の叙述がダイナミックな概念の対立と転換に欠け，ある平板な印象を与えるのもそのためではないか。だが，それら概念の対立をも巻き込んで荒涼とした風景を生む工業化社会の苛酷な側面が，ムージルの無機的な描写からむしろ見えてくるのである。

では以上のような概観から出て，評論を少し詳しく見ていくならば，第一に，このオーストリアの作家が深層との付き合い方においてマンと異り，いわば非フロイト的であることに気づく。ムージルの関心は深みへと直行するのではなく，表層にとどまる。中心部よりも周辺が問題となっているのである。「真実は（……）中心ではなく，周辺にあるのだ」（1075）というのが，「中心逸脱の旅」の副題をもつこの評論の冒頭の句である。ムージルのこの表層・周辺への固執が問題となろう。

ムージルが「一つの Symptom」から語り始めるのも，そうした彼の見方と関係していると言えよう。ギリシャ語で「偶然」の意味を含む Symptom は，「社会という肉体」（1088）の示す「症状」を意味していて，表面に，つまり深層の中心部から最も遠い箇所に，「偶然」のように現われ出ている病的な現象に，ムージルの目は注がれているのである。というのも，表層の現象，或は Physiognomie は，「内部と外部との圧力のもとで震える振動板である」（1083）からだ。しかし，微妙に震える表情を読み取るということは，暗い深部に下って行くことと同じ程に不確かさを相手にすることではないだろうか。このきわめて不安定なものをいかに捉えるかという，この問は，ムージルの知性の担う問として持続するであろう。しかしそれはまた時代の状況とも関っているのである。

「戦争はディオニソス的というよりもカーニバル的な印象を与えた。」（1075）強烈な体験がなされたはずだが人間の内部へと入っていかないのである。「つまり，われわれは，そこで様々のものになってみせたが，変ることはなかった。様々のものを見たが，何も感じ取りはしなかった。」（1076）冒頭から「変ってはいない」ことを繰り返し強調するムージルの文は，事柄のみならずわれわれ自身の体験が，われわれから遊離して，自己と無関係になる傾向を示していることに関心を寄せていく。それはつまり，体験を内部へと引き入れるところの「概念」をわれわれが所有していなかったからだ，とムージルは付け加える。「或はまた，概念にそのような体験の内面化を可能にするだけの磁力を有する感情を，われわれが所有していなかったと言うべきであろう」（1076）と。体験は自己の内部へ引き入れられることなく消え失せたようになり，あとに残ったのは「ある動揺」のみである（1076）。彼自身によって把握はされなかったが，生じた出来事は彼を取り囲む状況として堆積する。外の世界と内部の動きとの圧迫を受けて，ヨーロッパの「表情」に「震え」が生じている。

この「途方にくれたヨーロッパ」に伴う奇妙な副題「中心逸脱の旅」は，ところで，事柄の際限もない拡大拡散を意味するとともに，これを飲みつくそうとする途方もない認識の旅のゼルプストイロニーのこもった表現であるのであろうか。この不安定な状態に秩序をもたらすべく，何か概念をもって事を整理すること，すなわち「秩序づけること」（ordnen）を，ムージ

ルの評論が拒否していることはたしかである。いや，そのような「秩序づけ」や「意味づけ」が近代において果した役割りが，ここで問題化されてもいると解してよいであろう。「哲学なき時代」において哲学の代役をし，事柄の秩序づけに携わってきた「歴史」をムージルは批判することにもなる。体験の遊離と関係させて皮肉な口調で，ムージルは言う，「かの有名な歴史的距離とは，百の事実のうち，九十五が消えて，後に残った事柄を好きなように秩序づけるということなのだ」(1076) と。「秩序づけ」られたものは，自己とはいよいよ無関係になっているのである。

しかし（ムージル自身はそうした連関性を直接指示してはいないが)，このような疎外の中で，にもかかわらず，否，事柄が遊離するがゆえにより強引な，自己中心の「秩序づけ」はむしろ進み，事柄を事柄として捉えることから遠去るとともにそれはまた自我と無縁になっていった（自然科学的観察は精密化していく一方で)。そこには反主知主義的秩序づけも含まれる。秩序化と無秩序との圧力にはさまれた所で生じる「震え」が社会の Physiognomie となる。ではこうした状況でムージルは事柄にいかに接近していくのであろうか。

ムージルは「死んだ事実」に対して「生きた歴史的事実」を対置する (1077)。そして「生きた事実」への接近の方法として，「偶然」という，法則による秩序づけからこぼれ落ちた，寄辺なき，もしかしたら「非合理」なというべき要素に，突如関心が集中されるのである。「生じたすべての事に，偶然というある切実な感情が伴う。」(1077) それは「偶然という不思議な感情」とも表現される (1077)。「秩序づけ」ではすくい上げられない「偶然」(Zufall) に，体験を内部に引き入れることを可能にすべき「感情」(Gefühl)が結びついて，ein Gefühl von Zufall となって，出来事の周辺に浮遊している。そうであるなら，これを直観することが，出来事或は体験を自己自身と結びつけ内面化する契機だと，ムージルは言おうとしているのであろうか。もしそうならば，ムージルの知性は，非合理とは言わぬまでも知的認識を越えた何ものかとかかわりつつ，事柄の認識に取り組んでいるということになる。当方のこうした問に答えることなく，次に，「偶然」または「何か一回限りのこと」(1078) への志向は，「周辺」への志向と一致させられるのである。

「周辺」(Peripherie) に対するムージルの関心についてはすでに触れた。それは絶えざる拡大・拡散と関係している。「偶然」・「一回限りのこと」の直観への集中と，「周辺」への認識の拡大という，一見して矛盾することが，秩序づけられたものの中心からの逸脱という共通点において同列に扱われる。「決定的で原動力となるものをあまりに中心部に置いてはいけない。むしろ通常よりも心して，周辺に，周囲の状況 (Um-stände) に，(……) 偶然に，事柄を動かす決定的なものを求めなければならない。より正しく言うと，偶然ではないにしても，事柄と事柄との一貫した連りにおいて，いかなる法則にも支配されない形で事が事を生じさせるところの≪非法則的必然性≫にそれを求めてゆかねばならないのである」(1081) と。

拡散と集中のディレンマの中で，比喩が事態を一瞬凝固させ眼前に提示する。上記の文に先んじて次の譬えが挿入されていた。それは説明文が表現する以上のことをわれわれに提示するのである。

「偶然」の感情を実感させる場合の例として，最初に，あの，瓦の落下と通行人の譬えが引かれている。屋根瓦がゆるんで落下し，そこを通り掛った人に当った際に，瓦がゆるむということと，人がそこを通過するということは，それぞれ法則と必然性によって生じたことは認められるとしても，両者が同時に起きたのはどういうことなのか。ここから予感させられるところの「偶然」，或は「何か一回限りのこと」が，フィルムを逆回転させるような次の例において，その奇妙な時間の逆行を無言の内に頑固に

阻むことになる。しかも逆行を阻止した先に到達するイメージは意外な苛酷さをわれわれに示すであろう。「緑色の服を着た狩人が，緑の森の中で，褐色の鹿を射った。その過程を逆回しにしてみよう。弾丸が銃から発射され，火が出て，銃声がとどろき，鹿はがくとゆらめき，横に倒れる。鹿の角が，はじけるように上がる。そして鹿はそこに横たわっている。これを逆にさせる。鹿は体を起こす。しかしそれは普通の立ち上がり方ではいけないであろう。空中へ≪倒れ≫なければいけないはずだ。だがその前に，まず鹿の角が，はじけておどり上がる動きを，鏡の中のように反対にしなければならない。しかも鹿はその動きを終速をもって開始し，初速をもって終えなければならないであろう。弾丸は，幅の広い後尾を先にして後に飛び，散っていた硝煙は爆発音とともに凝縮してしまわなければならない……すなわち，ほんの一歩だけ時の流れを逆にするためにも，すでに起きたことをそのまま後戻りさせるだけでは不十分である。もし後戻りさせようとしたら，この世界全体を作り変えるだけの巨大な力が必要になるであろう。引力は下から上へと作用し，空中には，地平線ならず，地垂直線が伸び，弾道は思いもかけぬ仕方で変化しなければならないであろう。つまり，ある旋律を後から演奏する時には，もはやそれは旋律ではないのと同じで，もしも歴史の流れを逆にするとしたら，そのためには，時間と空間を根本から揺り動かさなければならないことになるのだ。事実，たった一頭の射たれた鹿を再び立ち上がらせるためにも，何か全く新しいことが起こらなければならない。それは事柄の逆回転とか訂正とかいったものではおさまらないのである。世界は，新しきものへの抑制しがたい意志に満たされているわけである。変化，進歩の強迫観念に満たされているのである。」(1078)

「偶然」というまことに頼りないものから出発したこの逆行不能の譬えは，異様な唐突さで，絶えざる進歩の強迫観念に満たされた世界像へと凝固する。時間・空間を根本から覆して世界を建て直さない限りは，進歩の強迫観念に満たされたこの世界に生きつづけるしかない，とこの譬えは告げているのであろうか。

時間的な順序に従って，時代の興隆・全盛・衰退という形で事柄を秩序づける，いわゆる歴史的構図の成り立つ所においては，またその図を踏まえた歴史逆行の，反動の構図も生じえようが，しかし，この人間的解釈の届かぬ「偶然」を逆手に使って展開された平面図においては，秩序づけ，または逆行の秩序づけの構図を生じさせる余地は奪われてしまっているのである。「進歩」によってわれわれは利益を受けたが，その弊害も大きい，という二面的な人間的な把握の余地もそこには残されていない。ムージルのイメージは次のように展開するのである。「人類の太古の夢が実現されつつある。(……)今日は成就の時代である。成就はつねに失望である」(1088) と。そして，「進歩」は「解体」と一体にされていく。「繁栄しつつある社会は，精神的には，絶えざる自己解体の過程にある」(1091) と。解体を内部で進行させている「進歩」の，凍りついたような図は，ただ仮借なく，過去へは戻れないことを告げる。「二度と，統一的な観念形態，一つの≪文化≫がわれわれのヨーロッパ社会におのずと生じることはないであろう。たとえ昔，そうしたものが存在したとしても（おそらくは昔のそれをあまりに美しく想像しているのであろうが），水は山を下って流れ，上ることはない。」(1091) ムージルはそのように平然と言い切る。

これはひとつの単純化である。マンが行うような進歩と反動の慎重な区別の可能性は，そこから排除されていくであろう。ムージルの文はその意味で非政治的である。機械工学を学び，「ムージル式色彩回転器」なる器械を発明した，このオーストリア帝国周辺都市生れの作家のイメージは，単調なほど機械的で，進歩と解体の凍りついたような平板な絵図に凝固しているのだ。その静的な構図から実際に飛び出してくる

のは，しかし，連関性なき事柄の氾濫であり，この無政府的な多様性を，まやかしの観念や総合で処理するのではなく，その混乱に耐えて生きよと，無言で告げているようでもある。というのも，多様なものの並存の中にいること自体は決して負のしるしではないことを，ムージルは彼独特の仕方で強調しているからである。

それは，法則的秩序づけや短時間の計画的な事の成就とは異った息の長いやり方が支配する空間と関係している。どうやら『特性のない男』の「カカーニア」的なものにつながる空間なのである[5]。すなわち，あやつり人形の糸枠にわれわれの存在をゆだねるのではなく，互いにもつれ合った無数の分銅をわれわれの存在にぶらさげて生きながら，自分でそれに振りを与えることができるのだという，多様なものの絡み合いの中の自由の「感情」を享受しうる状態がそこで想起されている (1082)。時間もまた，「非有機的に実現していながら，しかし有機的に成ったもの」(1081) を可能とするような，ゆったりとした流れをもつ。「ゴシック的精神の表現の中にある，異様に長く持続する意志の脈搏」は，このゆっくりとした「実現の技術」から生まれる (1081)。混沌とも見えるこの「非法則的必然性」(1081) の事態をオプティミスティックに受けとめる感性が生きている状態を，ムージルは，過去時称で書いていない。したがって読み方によっては，現在どこかでありえている事ともとれる。こうした多様性の強調を踏まえたムージルの文を振り返ると，ムージルはそもそも，過去において「統一的」であった時代が現実に存在していたとは本気で思っていないのではないかとすら感じられる。或は少なくとも，「統一的」であることをプラスとして主張はしていない。「統一的」という語は，上記の緩慢な生成の技術と対置され，「一つの計画に則って統一的に」行う方法 (1081) として否定的な意味合いの中で現われているのであるから。そして現代はこの後者の，計画化と秩序づけの方向をまさに突き進んでいる。

こうして力をこめて多様性を豊さと受けとめる状態をムージルは書き記したあと，いかにも唐突に，「そしてこの感情がわれわれから失われてしまった」(1082) と言って段落を締めくくる。

どうして失われたのか。ムージルの描き出すのは，結局は，認識される多様な事実とそれを苦痛と感じて統一的なものを求める試みの挫折の歴史である，と言ってよかろう。

まず，合理的精神は，啓蒙主義よりも遙か昔から始まっていた，と反主知主義の攻撃を切り返すような形でムージルは述べる。スコラ哲学も合理的であった。スコラ哲学において「思弁的性格を担っていた」合理性が，ルネサンスによって，「事実というアンタイオス的に確固たる大地に据えられた。」(1084)。今日，「≪不毛の機械≫の束縛」を訴える声が上がっているが，当時は，「偉大な人々にとって，それは力強く燃える新しい救済の体験の火」であった。事実を究める冷静な観察方法は，「魂にとって強烈な禁欲を意味し，魂はそれによってむしろ新たな方向へ力強く飛び立ちえた」のである (1085)。だが事実を究める科学は分化し，専門化するが，理論的総合が全体として分化と歩調を合わせて進まなかった。かくして，絶えず堆積する「事実の山の悪夢」に人は苦しめられることになる (1085)。18世紀の終り近く，人々は「精神によって世界を新たに建て直しうると信じた」が，その試みの失敗のあと，「つまらぬ瓦礫の山」が残るだけであった (1082)。あの多様への感情はその時すでに消えている。哲学の仕事を，いまや「歴史」が副業として受け持ち，事柄の秩序づけ，意味づけを行うが，その際，歴史哲学の在庫概念がやたらに主観的に持ち出される有様である (1086)。結局，すべては無秩序のうちにある。この混乱に秩序をもたらす「秩序づけ」によって新たな混乱，概念対立の際限なき生産が生じるのである。「それはバビロン的混乱の渦巻く精神病院に似ている。千の窓から，千の雑多な声，思想，音楽が

一斉に道行く人々に発せられる。明らかにそこでは，個人が，様々のモチーフの無秩序に活動する舞台となっており，精神とともに道徳も崩壊するのである。ところが，この気違い病院の地下室では，地下に住む鍛冶屋の神ヘファイストスの創造意欲にみちた槌の音が響きわたり，人類の太古の夢が実現されてゆく。例えば，空を飛ぶこと，一気に七里を走る靴，固い物体の透視といった，過去幾世紀にも渡ってこの上なく聖なる魔法の世界に属していた幾多の夢が，現実となってゆく。われわれの時代はこの奇蹟を成し遂げているが，しかし，もはや奇蹟を奇蹟と感じない。われわれの時代は，成就の時代である。そして成就はつねに失望にほかならない。憧れが，つまり，時代がまだなしえぬ何ものかが，今日，欠けているのだ。実は，その欠けているものがわが時代の心を苦しめているというのに。」(1088)

これが「途方にくれたヨーロッパ」の姿である。閉じ込められた空間に渦巻く雑多な声，地の底に響く生産の槌の音，そして全体をおおう失望感，この独特のアンバランスをはらんだムージルの現代絵図の背景には，動的な展開を欠きつつ長い崩壊の道を歩んで解体した多民族国家ハプスブルク帝国の精神的空気がある。解体をじっくりと身にしみて受けとめている精神からすると，この過程に対して，失われた憧憬を埋め合わせる観念や体系は，解体と無秩序の前では結局無力であるに等しい。こういう過去へ向けての憧憬製造や Pseudosystematik の虚偽はそこで自ずと露呈される。時代の不毛性のみが強調されるかに見える負の叙述のそこここに，しかし指標のようなものが埋め込まれているが，それはあくまでもまやかしの総合とか憧憬を否定する形でしか表現されてはいないのである。われわれはその叙述の仮借なさを力とするよりほかにない。例えばそれは，「しかし，哲学を持たないということを，われわれの時代の，単に否定的な特徴であるかのように描くのは誤りである」(1085)，或は，「この時代は，哲学を生みえないからというよりも，事実に合わない哲学の提供を拒否するから，哲学を持たないのである」(1085) といった表現で示されているのである。否定的に見えることが単なる否定的なことではないのを見抜く目は（しかしそこに弁証法的転換は生じない），時代の現実的力の誇示をまた絶望のしるしと見る目でもある。事実を踏まえて突き進む領域，現実の政治や経済の分野に生きる生き方は，「イデアリズムの無力に対する悪魔的な蔑視」を生むが，ほかならぬこの蔑視に，「時代の最も深い自信と時代の絶望的状況とが同程度に」現われているのだとムージルは言う (1086)。つまりわれわれは，先に挙げた「繁栄しつつある社会は，精神的には，絶えざる自己解体の過程にある」の文が示す状況へと，繰り返し追い込まれるのである。したがって，知性が価値を解体したという者たちに対しては，「知性が価値を解体しうるのは，価値が，それを支える感情という前提条件においてすでに亀裂を生じている時のみである」(1092) と，解体作用のその独自の力がむしろ深部に及んでいることをムージルは指し示すのである。

こうした解体によって生じる混沌に秩序をもたらすために，「意味付与の職務」(das Amt der Sinngebung) を「副業務として」引き受けている「歴史」(1086) に対する，ムージルの批判はすでに述べたが，彼はさらに，かなり唐突な叙述の転換の中で，「秩序づけ」の現実的形態としての国家に言及して，責任からの解放のシステムを一瞥させてくれるのである。「国家という機械に関与する専門家のグループに完全にまかせきりでいる状態」に，思慮ある市民のみならず，あの相争う諸イデオロギーまでが慣れっこになっているが，こうした「まかせきり」こそ「個人の社会への秩序づけ」のもう一つの面なのだと (1089)。大戦前の社会は，混沌を内にはらみつつ，この秩序づけをなんとか維持し，平和の様相を保っていた。したがって戦争は，「平和からの逃走」(1089) として，

つまり「秩序に対する魂の革命」(1090) として理解できるのではないか，とムージルは大戦勃発を捉える。しかも，この条件は除去されてはいない。戦争の体験によって人は結局変らなかったのではないかと冒頭に書いたムージルは，この魂の爆発，すなわち，ある特定のイデオロギーではなく「すべてのイデオロギーの周期的崩壊」が，戦争をやっと乗り越えてまだ疲労が残っているにもかかわらず，「今日，すでにまた近づきつつあるのが見られる」(1090) と言って，ある新たな破局の近きを予感しているのである。「権力者に対する≪まかせきり≫」は，戦前よりも悪化していることを指摘しつつ (1090)。

こうした「秩序づけ」，「意味付与」を突き破り事柄に迫るのが，知性の破壊力なのである。時代が哲学を持たないことをむしろ積極的に解したムージルの意図はそこにある。例えば物理の世界に関することを，ケプラーやニュートンの伝記のごときものにくるんで教え込むのも，ムージルからすれば教養の名の秩序づけであって，そこでは「本質的な事柄の価値がないがしろにされる」(1094) ことになる。「知性が多すぎて，魂が少なすぎるのではない。魂の問題について，われわれはあまりに知性を持たなすぎるのだ。」(1092)

トーマス・マンならこれまで述べてきたことを次のように文章化するであろう。「生の見せかけの完全さと調和を無意識の意識化によって破壊すること。そして分析，つまり≪心理学≫の道を歩み，解体過程をいくつか経て――この過程は，文化的統一の観点からすれば無政府状態と呼ばれるかもしれぬが，そこには停止も後戻りも，≪復古≫も，なんらかの確実な回復も存在しないのであるが――意識によって確保された自由な真の生の統一に向かって，完全な自己意識へと発展した人間の文化に向かって進むこと」(M 176) と。

しかしムージルには，認識と分析の道をこのように構造的に，見通しをもって，しかもはっきりと勇気づけをする一つの文にまとめることはできなかった。彼は，停止も後戻りも存在しない，解体と無政府状態を内に含む「進歩」の姿，つまり工業化の様相を提示することに集中している。少なくともムージルのこの評論には，解放と結びつく認識の喜びも，解体の向こうの統一せる生の希望も浮び上がってはこない。ただダイナミックな概念転換の構図も逆行も成立しない譬えを突きつけて，反動の手を冷やかに振り払い，彼自身は知性の道を進むが，これで，非合理的なものに対して彼の位置が確実に保証されたとは言えない。

知的であることを押し進めた時の，その向こうにある何ものかについては，「偶然」の感覚に暗示されたが，評論の終り近くで触れられる神秘家たちへの彼の関心にそれはまた表わされている。この Ratio und Mystik の十分な展開はムージルの長編小説にゆだねられるにしても，また Mystik は Ratio から切り離されることなく想定されるにしても，このような主知主義の彼方のものとかかわりつつ，この評論は，ある種の無機的状態を生む単純化（どのようにも解釈される危険をはらむ）をもって，時代の反主知主義に対立姿勢を示しているのである。そういう場が安全な地帯でないことは容易に察知される。そこに何か方向らしきものが表わされているとすれば，繰り返すことになるが，苛酷な「進歩」の過程において，現実には起こりえないであろうような，今日の世界を根本から覆した所から生まれる「何か全く新しいこと」を一方で直観させ，他方では，「秩序づけ」を否定し状況に知的に耐えることを無言で（比喩によって）告げることのみである。

だが先の Ketelsen も指摘するように，あの反動的な反工業化の思想と行動（これもまた一つの「秩序づけ」である）が実は，「逆説的な仕方で，ドイツにおいては，彼らの恐れるあの≫modernization≪ をむしろ促進させる結果となった」[6] ことを思うなら，事態の複雑さ，工業化社会の吸収力を再確認するとともに，ムー

ジルの問題意識の深さが予感されてくるのである。

注

1) ニーチェ『人間的な，あまりに人間的な』，第1部，Nr. 26 の箴言の標題。
2) Ketelsen, Uwe-K.: Literatur und Faschismus. In: *Neues Handbuch der Literaturwissenschaft*, Bd. 20 (Zwischen den Weltkriegen), Wiesbaden (Athenaion) 1983, S. 47.
3) Mann, Thomas: Die Stellung Freuds in der modernen Geistesgeschichte (1929). In: *Altes und Neues*, Frankfurt am Main (S. Fischer) 1953. S. 166～192. 引用にあたっては，前野光弘訳（新潮社『トーマス・マン全集』第10巻，134～152頁）を参考にした。――本文中のカッコ内の指示（M 174）は原文の引用箇所を示す。
4) Musil, Robert: Das hilflose Europa oder Reise vom Hundertsten ins Tausendste (1922). In: *Prosa und Stücke, Kleine Prosa, Aphorismen, Autobiographisches, Essays und Reden, Kritik.* Reinbek b. Hamburg (Rowohlt) 1978. (Gesammelte Werke. Hrsg. v. Adolf Frisé. Bd. 2). S. 1075～1094. 本文中のカッコ内の数字は引用箇所を示す。
5) オーストリア独特の多様なものの並存及びダイナミックな展開に乏しい静的な雰囲気については，拙論「R. ムージルの『特性のない男』について」（横浜経営研究，II/1 (1981) 17頁。II/4 (1982) 22頁）を参照。
6) Ketelsen, Uwe-K.: a. a. O. S. 47.

〔横浜国立大学経営学部教授〕